

# コミュニケーションに課題を持つ高校生への通級による指導の一試み

## — 生徒の思いを反映した個別の指導計画の作成と目標達成に向けて —

宮城県蔵王高等学校  
教諭：海部裕美子

### 1 はじめに

平成30年度から高等学校における通級による指導が制度化され、本校においても今年度より導入することとなった。科目名を「あすなるスタディ」とし、自立活動6区分の中の「心理の安定」「人間関係の形成」「コミュニケーション」に課題を持つ2年生の7名の生徒が学んでいる。県内での先行事例に関する情報などもほぼない中、生徒の実態把握の方法や適切な指導の在り方など課題が多い。手探りで始めた通級による指導において生徒が抱える困難を改善するための手掛かりを得るために、本研究に取り組むこととした。

### 2 主題設定の理由

高等学校の通級による指導は、ほかの教科・科目と同様に単位の履修と修得が可能である。高等学校学習指導要領総則には「学校においては、生徒が学校の定める個別の指導計画に従って通級による指導を履修し、その成果が個別に設定された指導目標からみて満足できると認められる場合には、当該学校の単位を修得したことを認定しなければならない」と述べられている。本校の通級による指導は少人数グループでの指導と併せて個別の指導を適宜行うため、生徒の思いを反映させた目標の設定及び目標達成に向けた指導を行うことができる。

本校で通級による指導を受けている生徒には共通した困難の傾向がある(図1)。4月に授業を始めた際に、活動をする中で教師が気付いた生徒のよさやできたことを伝えたり称賛したりしても「できていません」「分かりません」と言って受け入れることができず、自己肯定感の低さが気に掛かった。また、自分の考えをまとめたり伝えたりすることが苦手なため、自分の思いを教師に伝えることができず悶々とする様子

が見られることもあった。更に、ほとんどの生徒が自分の得意なことや苦手なことについて把握できておらず自己理解が十分ではなかった。図1に示したように、通級による指導を受ける生徒は様々な困難を抱えているため、生徒自身の気付きを促しながら困難の改善を目指すことが望ましいと言える。



図1 通級による指導を受ける生徒が抱える困難の傾向

そこで、教師と生徒との対話を通して生徒の自己理解を促し、学習における成功体験を積み重ねることで自己肯定感を育みたいと考えた。更に、少し手を伸ばせばできる活動を積み重ね、身に付けるべき力について生徒自身が理解できるように働き掛けることで、目標の達成と単位の修得に向けて主体的に取り組めるのではないかと考えた。

### 3 研究目標

対話を大切にした通級による指導を通して、生徒の自己理解を促すとともに自己肯定感を育み、個別の指導計画の目標達成に向けた主体的な取組を促す指導法を探る。

### 4 研究仮説

通級による指導において生徒との対話を大切にし、

生徒の思いを個別の指導計画の作成や実践内容に反映させることができれば、生徒の自己理解が進み自己肯定感も育まれ、目標の達成に向けて主体的に取り組むようになる。

## 5 研究の方法

- (1) 生徒との面談や日々の実践の記録及び生徒自身が記入した授業の振り返りから、生徒の自己理解や自己肯定感の変化を把握する。
- (2) 目標の内容と達成状況を生徒が確認できるよう定期的にワークシートを整理し、面談を実施する。

## 6 実践内容

- (1) 生徒の思いを反映した個別の指導計画の作成  
個別の指導計画は以下の内容で作成した(表1)。生徒と話し合って作成した項目には◎、教員間で情報共有している項目には●、本人・保護者へ提示している項目には○を示した(予定も含む)。

表1 個別の指導計画の内容と運用について

内容	運用
生徒の実態	◎●○
年間目標	◎●○
実態と自立活動6区分27項目との関連	●○
指導内容	◎●○
年間目標に対する評価	●○
前期(後期)目標	●○
前期(後期)中間評価	●○
前期(後期)末評価	●○

「あすなるスタディ」の評価は評定ではなく所見で示す。また、定期考査は実施しないが、定期考査後の成績会議の場で評価を提示することで単位認定の根拠を明確にしていきたいと考えた。

- (2) 4～9月の授業の計画

4月 実態把握 ・自己紹介 ・人と関わる活動(トランプ等) ・コグトレ棒を使った活動 ※集団参加の様子を観察	5月 聞く力を高める ・ジェスチャーゲーム ・メモを取る練習 ・挨拶練習 ・職業インタビュー ※インターンシップを意識
6月 見通しを持った生活 ・将来について→年間目標の設定 ・中間テストに向けた勉強の計画 ・テスト勉強の仕方 ※生徒との面談の実施	7月 相手も自分も大切に ・共感について ・仲間の誘い方、入り方 ・気持ちをコントロールする方法 ※修学旅行を意識
8月 ビジネスマナー ・好ましい立ち居振る舞い ・報告、連絡、相談の仕方 ・困ったときの対処方 ※インターンシップに向けて	9月 生活の見直しと振り返り ・前期目標の達成状況 ・インターンシップの振り返り ・期末テストに向けた勉強の計画 ※今後伸ばしていく力の確認

授業は学校行事と関連付け、通常の学級の学習における生徒のつまづきを想定して課題解決を図るための指導事項を計画した。

### (3) 具体的な実践報告

#### ① 4月の実践

最初の授業で自己紹介を行った。生徒の特性に配慮し、ワークシートに記入すれば原稿が完成し、それを読み上げれば自己紹介できるよう工夫した。しかし、生徒A及び数人の生徒は自分の名前と出身地しか書けず(写真1)「好きなこと」「1年生の思い出」「2年生で頑張りたいこと」などは未記入であった。

Aスタ自己紹介用原稿

私の名前は「                    」です。「                    」とよんでください。

出身地は「                    」です。

好きな食べ物は「                    」です。  
おすすめ(のお店)は「                    」です。

好きな有名人は「                    」です。

趣味は「                    」です。  
理由は「                    」だからです。

1年生の一番の思い出は「                    」でした。

2年生では「                    」を頑張りたいです。

どうぞよろしくお願いいたします。

写真1 生徒Aの自己紹介用原稿

生徒Aは自分の考えのまとめ方が分からず書くことができなかつた。また、なぜ書けないのか自分でも理由が分からず書くことのできない生徒がいることが生徒Bとの会話から判明した。

教師：「どうして書かないの？」  
生徒B：「どうせ分かんないから。」  
教師：「ちゃんと見てないのにどうして分からないと思うの？」  
生徒B：「えー、何でだろう。そんなこと考えたことないから分かんない。」

生徒Bはこれまでの経験から「自分は何をやってもうまくいかない」と投げやりで、考える習慣が身に付いていないことが言葉に表れていた。

4月はゲームを中心に行い、人と関わることに慣れることを重視した。新しく始まった教科であること、4月に転入してきた教員が担当であること、日頃から人間関係が希薄で限定的な生徒たちであることなどから、1回目の授業は硬い表情で黙々と活動する状態であったが、回数を重ねるごとに表情が和らぎ、4月下旬にはやりたいことを単語などで伝えることができる

ようになってきた。

## ②5月の実践

連休明けの授業は4月下旬に和らいでいた雰囲気  
が再び堅くなり、全てリセットされているように感じ  
るスタートとなった。ジェスチャーゲームなどを取り  
入れて、コミュニケーションは言葉だけでなく身振り  
なども含まれることを学習しながら、生徒が場の雰  
囲気に慣れることができるように働き掛けた。

実践に取り組む中で、生徒の数人は話を聞きなが  
ら大事なことを整理して書くことが苦手であるため、  
日々の生活でメモする習慣が身に付いていないことが  
分かった。そこで5W1Hを意識して話を聞きメモす  
る練習を繰り返し行った。生徒Aは徐々に書くことに  
慣れ、自己肯定感の高まりが感じられる文章が授業の  
振り返りに見られるようになってきた(写真2)。

場に応じた言葉づかいで話すのを練習して、これを  
いかしてインタビューしたいです。メモできるよう  
になってきたと思います。

写真2 自己肯定感の高まりが感じられる振り返り

場に応じた言葉づかいで話すのを練習して、これを  
いかしてインタビューしたいです。メモできるよう  
になってきたと思います。

(生徒A：5月28日の振り返りより)

練習したことを生かす場として、管理職や事務職  
員などの協力を得ながら、9月に行われるインターン  
シップを意識した職業インタビューを実施した。特に  
人間関係の形成を苦手とする生徒Cは職員室に入るま  
で10分ほど時間が掛かった。その間の会話である。

教師：「そろそろ職員室に入ろうか？」  
生徒C：(首を横に激しく振って)「無理！」  
教師：「心の準備ができたなら言ってね。」  
生徒C：下を向いて無言。  
教師：「何か不安なことがあるの？」  
生徒C：「恥ずかしいし質問できないかも。」  
教師：「じゃあ、相手の顔は見なくてもいいか  
ら、首の辺りを時々見るだけならどう？」  
生徒C：「それならできる。」

生徒Cは相手を見ることが苦手で、日々の授業で  
も見ることを意識するだけで動きが止まってしまう。  
そのため「難しいときはできることをすればよい」と  
事前に伝えていたが、取り組もうとする意欲はあるも

の踏み切れずに葛藤していた。また、伝えたいこと  
を相手にどのように伝えるのか、適切な表現の仕方が  
分からないことも動きが止まってしまう原因となっ  
ているので、選択肢を示しながら会話を進めることが本  
生徒にとっては有効であると日々の実践から感じている。  
前述した対話のように生徒ができそうなことを教師  
が提案することで、自分のできることとできないこ  
とを自分で判断し活動をやり遂げることができた。生  
徒Cにとっては達成感を味わい、自信につながる経験  
となったことが振り返りから読み取れた(写真3)。



実際に行って職業インタビューをしてみても、最初は緊張しまくり  
だったけど、だんだん慣れてきたのもあって考えてきた質問を全部することが  
できた。そして特に言葉づかいも気をつけながらできた。

写真3 職業インタビューする生徒Cと振り返り

実際に行って職業インタビューをしてみても、最初  
は緊張しまくりだったけど、だんだん慣れてきたの  
もあって考えてきた質問を全部することができた。  
そして特に言葉づかいも気をつけながらできた。  
(生徒C：5月30日の振り返りより)

5月の実践では、インターンシップに向けた学年  
の動きに合わせ、自分の長所や短所について考え自己  
紹介カードの記入につながる学習も行った。

## ③6月の実践

あすなるスタディを受講する全ての生徒と二者面  
談を行い、本人の抱える困難、今後どのようになりた  
いと考えているかなどを丁寧に聞き取り、個別の指導  
計画と個別の教育支援計画を作成した。生徒の抱える  
困難を把握するに当たり、宮城県総合教育センターの  
「Myアシストシート」と埼玉県総合教育センターの  
「ソーシャル・スキル尺度【中学生・高校生用】」を  
活用した。その結果、生徒の抱える困難と教師の見立  
てが一致している部分と違っている部分を明確に把握  
することができたため、生徒の思いを計画に反映する  
ことができた。目標は生徒自身が「頑張れば達成でき  
そう」と思えるかどうかを重視して設定した。

二者面談での生徒Dとの会話である。

教師：「2ヶ月やってみて何か変わりましたか？」  
生徒D：「はい。前はできなかったのにできるようになったことがあります。」  
教師：「それは何ですか？」  
生徒D：「インターンシップの自己紹介カードが上手に書けたことです。前の私なら何を書いてよいか分かりませんでした。あと、言いたい言葉が出てくるようになりました。」  
教師：「それはすごいですね。これからどう取り組みたいですか？」  
生徒D：「3年生でもこの授業を続けて、就職に向けた練習がしたいです。自分の考えをもっと話せるようになりたいです。」

生徒Dについては三者面談の場で保護者からも「会話の中で使える言葉が増えて、時々大人っぽい表現もするようになった。」と成長を感じることでできる報告があった。

#### ④7月の実践

生徒AとCに対して、ボディイメージを高めること、体を動かしながらコミュニケーション力を高め人間関係を構築することをねらいとし「新聞棒（参考文献(4)）」を活用した活動に4月から継続して取り組んできた。人と関わることに慣れるに依り初対面の人と話すこともできるようになったので、外部からの授業見学者と一緒に取り組む場を設定した（写真4）。



写真4 授業見学者とともに活動する生徒

通級による指導を始めて4ヶ月が経過し、生徒に変化が見られ始め、お互いに声を掛け合いながら活動できるようになってきた。また、教師の働き掛けを減らしても生徒同士の関わりができるようになってきた（写真5）。この活動では、お互いの思いを直接伝え

ることは難しく教師の支援が必要だったが、成功させる方法を生徒が自ら考えて取り組めたことで、自己肯定的が高まった



写真5 生徒同士の関わり

ように感じられた。また、修学旅行を意識した仲間作りに関する学習では、生徒Cに著しい変化が見られた。学習に取り組む前は「これまで仲間に入れてもらいたくても入れてもらえなかった」と話しており、「どうせまた入れてもらえない」と不機嫌な表情になっていた。そこで、学習を重ねる中で、相手にも都合や気持ちがあること、自分の思い通りにものごとが進まなかったときにイライラして人やものに当たったり泣いたりしてきたことが周囲にどのように受け止められてきたかを教師と一緒に考えたところ、自他の考え方の違いに気付くことができその日の振り返りには前向きな気持ちが表れていた（写真6）。

仲間の入り方で断られることがあっても次頑張ればいつかは入れてくれるということがわかった。そして断られたといってもイライラとかしないようにこれから気をつけたいと思います。

写真6 前向きな気持ちが表れた振り返り

（生徒C：7月16日の振り返りより）

生徒Cは自分の言いたいことを伝える適切な表現が分からないこと、他人から誤解を招く言動によりトラブルに発展することが多いことから、人間関係の形成に大きな課題と苦手意識を持っていた。しかし、この学習を通して良い関係性を築くには自分も言動に気を付ける必要があることが分かってきた。

4月当初、投げやりな様子だった生徒Bもソーシャルスキルトレーニングや「コグトレ（参考文献(5)）」のプリントに継続して取り組み「できる」ことを肯定的に受け止めるようになった。20分間集中し

てプリントに取り組むことのできた生徒Bとの会話である。

教師：「すごく集中できるようになったね。」  
 生徒B：「そうですね。この活動は得意だから。」  
 教師：「普段の授業はどう？」  
 生徒B：「集中できてないです。」  
 教師：「どうして？」  
 生徒B：「ここでの活動はできることだけ、授業は分からないことがあるから。」

生徒Bは肯定的に受け止める様子が見られるようになってから、自分の苦手なことを教師に伝えることができるようになった。これまで教師から怠学と捉えられる行動が多かったが、指示を十分に理解できていないことが原因であると分かった。

#### ⑤8月の実践

インターンシップにおいて想定される場面の報告・連絡・相談や挨拶、言葉遣いについて練習した。生徒が不安と感じていることを1つずつクリアにすることで、安心して実習に参加できるようにした。

**表2 担任及び養護教諭が把握している生徒の成長と今後の課題**

生徒名	教師	生徒の成長	今後の課題
A	担任	表情と雰囲気明るくなり積極的になった。頼まれたことを嫌がることなくすぐに行動に移せるようになった。	やるべきことを考えて行動できるようになること。 分からないことを聞けるようになること。
	養護教諭	人間関係が広がり、気楽に話し掛ける人が増えた。一度経験したことはできる。	保健室利用の際に自分の状態などを自分で説明できるようになること。
B	担任	指示を理解し行動できるようになってきた。分からないことを伝えられるようになった。	周囲に流されず、自分のやるべきことに取り組めるようになること。
	養護教諭	「できないから」と諦めたりしない意欲的な様子が見られるようになった。計画性を持つ大切さが分かってきた。	人の気持ちが理解できず、適切でない言動がみられるので、相手の気持ちを考えた発言ができるようになること。
C	担任	表情が穏やかになり精神的に安定した。友人との関係も以前と比べ良好である。	仲間のことを理解し相手のことを考えた言動ができるようになること。
	養護教諭	言いたいことを表現する方法が分かりイライラが減った。考えて行動するようになった。	相手の気持ちを考えた言動ができるようになること。
D	担任	会話がしやすくなった。(通級を受けていることから意識して話し掛けているため。)	限られた人との関わりだけでなく、人間関係を広げること。
	養護教諭	友人に対して自分の思いを伝えられるようになった。具合が悪い時に自分の状態を説明できるようになった。	流されやすいので善悪を自分で判断して行動できるようになること。

#### ⑥9月の実践

目標の達成状況を個別に確認し、達成できていない生徒が意識して取り組むよう声掛けした。目標には生徒の思いを反映したのでほとんどの生徒が達成できた。

#### (4) 担任及び養護教諭との情報共有

通級による指導を受ける生徒は保健室の利用頻度が高い。そこで、身近な存在である担任と養護教諭との連携を密に行い指導に生かすようにした。実践報告で述べた4人の生徒について、現時点で情報共有している生徒の成長と今後の課題について表2にまとめた。

#### (5) 前期目標の達成状況

個別の指導計画の前期目標について、7人中5人が達成できた。達成できていない2人についても生徒の自己評価では達成できたと感じている。「できた」と肯定的に捉えた点を評価した上で、実際に取り組んだ場面を生徒に質問すると、教師が目標を達成できたと感じている生徒は具体的な場面を挙げて説明できたが、教師が十分でないと感じている生徒は漠然とした説明であった。

## 7 成果と課題

### (1) 成果

#### ① 自己理解について

通級による指導を受ける7人のうち、4人の生徒の自己理解が4ヶ月の取組で促されたと感じている。これまで通常の学級の中で学んできた生徒にとって、教師と関わる時間は多くはなかった。しかし、通級による指導では個別の指導を取り入れ、生徒の思いを教師が受け止め、安心して話せる関係性の構築を大切にしながら授業を進めたので、生徒と教師の対話が増えて、自己理解を促すことができたと思われる。また、生徒のペースを大切にした対話を積み重ねたことが、生徒が自分に関することを自己決定することにつながった。この経験は生徒自身が自分の得意なこと、苦手なこと、好きなこと、嫌いなこと、できること、できないことに気付くきっかけになったのではないかと考える。

#### ② 自己肯定感について

目標に生徒の思いを反映し、生徒が「できる」「得意である」と実感できる活動を繰り返し行ったため、目標達成に向けた主体的な取組を促すことができた。「できる」実感は生徒の意欲を喚起し、学習の積み重ねが成功体験につながり自信になった。特に自己理解を促すことのできた4人は自己肯定感が育ったと感じられる会話や文章が増えてコミュニケーション力が向上した。

### (2) 課題

#### ① 今後の対応について

通級による指導を受ける生徒のうち3人については自己理解の促しが十分ではない。3人の共通点は、生徒自身が感じている困難と担任や教科を担当する教師の見立てとの差が大きいことである。今後は生徒自身のメタ認知<sup>1</sup>を高めることを意識した対話や活動を取り入れたり別のアプローチを試みたりすることで、生徒が成長を実感できるように進める必要がある。

また、通級による指導で苦手なことの改善が見られた生徒に関しても、通常の学級の中で今回得られた成果を生かすためには学年や教科を担当する教師から協力を得て指導を進める必要がある。授業のユニバーサルデザイン化や合理的配慮の提供の在り方とともに校内支援体制を構築することで通級による指導がより効果的なものになることが期待される。

#### ② 年間目標の達成と卒業後の進路に向けて

今年度は教師が把握した生徒が抱える困難に対して少し手を伸ばせばできる活動を積み重ねることで年間目標の達成を目指している。しかし、次年度以降は在学中の学びが卒業後の進路や生活に生かせるような指導の方法を明らかにすることが求められる(図2)。

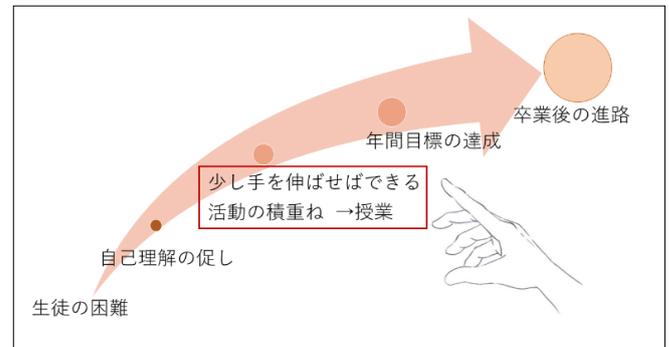


図2 卒業後の進路の実現に向けたイメージ

## 8 おわりに

高等学校での通級による指導は始まったばかりであり、望ましい指導の在り方についてはまだ明確には分からない。しかし、生徒との対話を大切にすることで生徒の自己理解が促され、学習の中で成功体験を積み重ねることにより自己肯定感を育むことができた。生徒の卒業後の進路の実現に向けて今後も生徒の思いに耳を傾け、実践を重ね検証を続けたい。

※本稿は、本人・家族の承諾を得て、掲載しています。

## 9 参考文献

- (1) 「高等学校学習指導要領」文部科学省(平成30年3月)
- (2) 「高等学校における発達障害等困難のある生徒への個に応じた支援の推進」宮城県総合教育センター平成28年度専門研究特別支援教育グループ
- (3) 「ソーシャル・スキル・トレーニング(SST)に関する指導プログラムの開発」埼玉県平成18年度総合教育センター研究報告書第307号
- (4) 「不器用な子どもたちへの認知作業トレーニング」宮口幸治、宮口英樹(2017)三輪書店
- (5) 「コグトレみる・きく・想像するための認知機能強化トレーニング」宮口幸治(2017)三輪書店

<sup>1</sup> 自分の思いや行動を客観的に把握し認識すること。